

# 署名を拒否するステイヴン\*

小田井 勝彦

## はじめに

*A Portrait of the Artist as a Young Man* (以下、*Portrait* と略す) の第5章第1節において、登場人物のひとり MacCann を中心として平和に関する署名運動が行なわれ、主人公の学友 Cranly や Davin は署名をする。その一方で、主人公 Stephen は署名を拒否し、机の上に飾られているロシア皇帝の写真を示唆しながら、MacCann に対して “Keep your icon. If we must have a Jesus let us have a legitimate Jesus.” (5.852-53)<sup>1</sup> と吐き捨てるように述べる。そこで、もうひとりの学友 Temple がその言葉の真意を尋ねるものの、話は別の方向に脱線してしまう。それゆえどのような意図でこの言葉を Stephen が言ったのかは語られず、机の上に飾られているロシア皇帝を「君の偶像」と切り捨て「正統的なイエス」を持つべきだと述べていることから、運動に反対していることはわかるものの、どのような理由により何に反対しているかは作品中明示されないままなのである。

自伝的小説の *Portrait* において、主人公 Stephen は作者 Joyce の実人生が反映され、作中の多くのエピソードは Joyce の伝記的事実を基にしている。上記の署名運動も実際に行なわれたものであり、「ジュネーブ条約」を海戦への適用、ダムダム弾や毒ガスの使用制限、恒久的な仲裁裁判所の設置を議論するために、1899年ロシア皇帝 Nicholas II が「万国平和会議」を呼びかけ、「ハーグ陸戦条約」が締結されたことに対する感謝状を贈るための署名運動であった。Joyce は実際にこの署名を拒否しているのである (Levenson 26)。

Joyce は、評論や公開されている書簡そして作品で、政治的な事柄に関する明確なメッセージをあまり発信していない。そして、*Portrait* における主人公の様々な発言は、Joyce が社会や政治に囚われない芸術至上主義者であるという印象すら与える。しかしながら、故国アイルランドではアイルランド文芸復興、自治権を求める攻防、独立戦争そして内戦が行なわれており、また Joyce が暮らしていたヨーロッパ大陸では第一次世界大戦、第二次世界大戦が行なわれ、Joyce は血生臭い戦争の時代に生きていた。それゆえ Joyce が政治的状况に無関心のまま芸

\* 本稿は、2017年10月28日に行なわれた日本英文学会中国四国支部第70回大会における口頭発表「*A Portrait of the Artist as a Young Man* における友人たちの肖像」の内容の一部に大幅な加筆、改変を行なったものである。

<sup>1</sup> *Portrait* からの引用は章と行数で、*Ulysses* からの引用は挿話と行数で表記する。

術至上主義者でいられたはずはなく、事実、明確な立場は示されないが、時事的な事柄が作品中に多く登場する。したがって、作品の裏側に秘められた Joyce の政治的メッセージの理解が作品の性質を明らかにする上で重要である。

話を本題に戻そう。上述のような時代を生き、代表作 *Ulysses* において迫害や不正に対して力で対抗することを訴える *The Citizen* に対して、主人公 Bloom に大事なものは「愛」であると語る作者 Joyce が、好戦主義者であるとは考えづらい (12.1485)。ではなぜ Joyce は、この署名を拒んだのであろうか。

このシーンに関しては従来 Levin や Ryf に代表されるように、Stephen の反抗心や友人たちとの隔絶を表すものであるとされ、Stephen の芸術至上主義を説明する文脈で使われてきた (Levin 58, Ryf 21)。このシーンに政治的な思想を読みとったのは Manganiello であるが、熱狂主義的な社会民主主義に Joyce が反対していたことは指摘されているものの、なぜ署名を拒んだのか、また「正統的なイエスを持とう」と言った真意については具体的に説明されているとは言い難い (36-37)。そこで本稿では、作中でこの署名活動を行なう MacCann とその思想の背景を伝記的資料に求めることで、その人物像と思想を分析し、上記の問いの答えを見つけたい。

## 1. MacCann のモデル Francis Sheehy-Skeffington

*Portrait* に登場する学友たちの多くには実在のモデルがいる。MacCann にもモデルがあり、それは Francis Sheehy-Skeffington である。Sheehy-Skeffington という名字は、のちに Hanna Sheehy と結婚した時に、フェミニストであった彼が自らの名字の前に妻の実家の名字を付けくわえたものである (本稿では便宜上改名後も Skeffington とする)。この節では、Levenson による Skeffington の伝記 *With Wooden Sword* を中心にして、彼がどのような人物であったのか、そして Joyce との関係を探っていきたい。

Skeffington は Joyce よりも 4 年早く 1878 年に生まれた。父親 Joseph Bartholomew Skeffington は教師兼学者であり、のちに視学官として国立学校の運営に携わった。母親 Rose は父親よりも 18 歳年上の農家の娘で、1829 年生まれであることを考えると母親はじゃがいも飢饉の体験者であろう。若い頃彼女は家計を支えるために渡米し、そこでフェミニズムに感化されたようであり、その思想が息子に引き継がれた可能性があるとして Levenson は指摘している (4)。

彼は現在の北アイルランドにあるダウン州で幼少期を過ごした。MacCann という登場人物名は、アイルランド北部出身であることを示すために選んだと弟 Stanislaus Joyce は証言している (121)。その土地の様子を Levenson は次のように説明している。

The dominant culture there, during his youth, was Protestant, pro-British, and anti-Catholic. The cleavage between the Catholic and non-Catholic communities was sharp, and Francis learned early about injustice and persecution(10).

プロテスタントが支配する町で不正と迫害を幼少期に体験したことで、ナショナリストというもうひとつの顔を持つことになった。そして、彼が受けた教育も人格形成に大きく貢献している。視学官であった父親は、自らが運営に関わる学校で行なう教育の実験の目的もあり、息子を学校には通わせず、自らの手で教育した。彼の学校での指針である「秩序、美德、道徳性、他者への思いやりの気持ち」(Levenson 9) を息子に教え込むことに心血を注ぎ、あらゆる不正に対して信念を曲げずに戦い続ける正義の人が誕生した。

1896年に University College Dublin (UCD) に入学するが、この頃には Skeffington の思想はほぼ固まり、それらは生涯変わることはなかった。彼はフェミニストとして女性参政権獲得のために戦い、平和主義者としてイギリスの徴兵反対運動をした。一方で彼はナショナリストでもあり、Michael Davitt の死後 1908年に彼の伝記を出版しているほか、Young Ireland Branch of the United Irish League や Irish Citizen Army などの創設にも関わっているが、後者に関しては軍事化路線に反対して辞めており、あくまでも平和主義者としての意思を貫き通した。Levenson は「すべての政治改革、経済改革は一滴の血も流すことなく成し遂げることができると彼は信じていた」(18) と述べており、理想主義的な人物である。Skeffington は、教職や UCD の学籍係を経てジャーナリストとなり、*The Irish Citizen* などの新聞を発行し、自らの主張を訴え続けたのである。生体解剖反対論者という側面を持つほか、肉食主義者、絶対禁酒主義者でもあり、真面目で潔癖な人物である。

しかしながら、学校に通わせず父親自らが教育したことで、負の部分を生み出したことは否めない。学校に通わなかったことで少年時代に友だちを作ることはなく、大学に進学するまで孤独であった。Levenson は大学に進学した頃の様子を次のように述べる。

Because of his solitary childhood and the need to be self-sufficient, Francis brought with him to college an imperviousness to public opinion — an indifference to the impression he might be making on others(15).

のちにジャーナリストとして書いた文章でいわゆる「炎上」をした際にも、むしろ名前が知られるようになって良かったと考える傾向があり、他人の意見を気にしない性格はその後変わることはなかった。それは彼の外見にも現われ、多くの人から注目を集めるものであったようだ。Levenson は外見を次のように説明する。

Short—not much over five feet five—deceptively frail-looking, and with a soft, fair, badly trimmed beard, he always dressed in a rough gray tweed suit with knickerbockers, long stockings, boots at least one size too large for his feet, and, as time went on, a large button in his lapel proclaiming “Votes for Women” (15).

髭を剃ることに反対して髭は伸ばしっぱなし、街中や大学で年中登山の格好をしていることは、かなり目立つ特徴である。学生たちは彼が常に履くズボンから“knickerbockers”というあだ名を付け、一方 Joyce はたっぶりの髭から“Hairy Jaysus”というあだ名を付けた。この外見は *Portrait* にも受け継がれ、“a squat figure in a shooting jacket and breeches and with a fairgoatee standing in the wind…” (5.122-23) という描写にも反映されている。Joyce の伝記を書いた Bowker は、Skeffington を「正真正銘の変わり者」(67) と説明しているが、それが当時の彼への一般的な評価だったのかもしれない。

では、このような人物と Joyce の関係はどのようなものだったのだろうか。Levenson は次のように要約している。

In many ways the Joyce-Skeffington friendship resembled Joyce's love-hate relationship with Ireland. Skeffington was important to him but troubled him. This seems obvious from the way he portrayed Skeffington in his writings and from the many references (generally derogatory) in his correspondence. Joyce told his brother Stanislaus (who worshipped him and followed his career closely) that, after himself, Frank Skeffington was the most intelligent man at the college. The importance of Skeffington's opinion of him and his reluctance to admit it is clear as well(23).

この引用で述べられているように、書簡集に残されている彼に関する Joyce の発言は、「最も忌まわしい詐欺師だ」(*Letters II* 81)、「耐え難い奴だ」(97) など侮蔑的なものが多い。Skeffington は他人の言葉には一切耳を貸さず、理想主義的

な正義に基づいて発言をする。*Portrait*における MacCann の次の引用のような発言も、実際に言われたものであるかどうかは不明であるが、おそらくそれに近いことは言われたと推測できる。自らがやや潔癖すぎるの主義を主張するのみならず、同じようにせよと仲間にも求め、批判をするのである。

—Dedalus, said MacCann crisply, I believe you're a good fellow but you have yet to learn the dignity of altruism and the responsibility of the human individual(5.882-4).

彼が Joyce に対して不快を感じたものは、売春宿に通うなど性に対する奔放さと宗教に関することであつたと Levenson は述べている (24)。UCD に入学したところの Joyce はすでに信仰を失っていたが、*Portrait*での “how your mind is supersaturated with the religion in which you say you disbelieve.” (5.2335-36) という Cranly の質問が当時の Joyce を反映しているならば、Joyce はまだ宗教のことで疑心暗鬼であつたはずで、Skeffington による性と宗教に関する批判は大きく Joyce の心を悩ませたはずである。そしてそれは *Portrait* の前身である *Stephen Hero* に次のように反映されている。

McCann's insistence on a righteous life and his condemnation of license as a sin against the future both annoyed and stung Stephen(52).

Stanislaus に「僕のつぎに賢い男だ」と語つたとされていることからわかるように、Joyce は Skeffington のことを認めているからこそ彼の言葉が胸に突き刺さり、激しく拒絶の反応を示すのであろう。Levenson の “love-hate relationship” という言葉は的を射ている。次の引用は、McCann (*Stephen Hero* においてはスペルが異なる) が多く登場する *Stephen Hero* の第16章を書き終え、第17章を執筆していた Stanislaus に宛てた1905年2月7日付の手紙である。

I am sure however that the whole structure of heroisms is, and always was, a damned lie and that there cannot be any substitute for the individual passion as the motive power of everything—art and philosophy included. For this reason Hairy Jaysus seems to be the bloodiest imposter of all I have met(*Letters II* 81).

この引用の2段落前には“Hairy Jaysus”の描写に取り組んでおり、「英雄的行為を探ることはなんと低俗なことか」と嘆いている。そして引用にあるように「あらゆることの動機として個人の情熱に代わるものはなく」、ヒロイズムも個人の情熱から生まれたものにすぎないと Joyce は言いたいのであろう。

そして、*Stephen Hero* における Joyce の攻撃は露骨である。McCann が自らの主義を述べるのに対して、Stephen は「すばやい攻撃でこれらの理論を嘲り笑うのを楽しんだ」(49)とあり、登場人物たちの間で行なわれた会話が再現され(50-51)、McCann の理想とするものが空理空論であることが提示される。理想主義的な正義を掲げてそれを学友たちにも強要することへの Joyce の攻撃である。では、McCann の思想の何が空理空論であるか。それを探るためにモデルとなった Skeffington の思想の背景となるものを探っていく。

## 2. William Thomas Stead の思想

*Portrait* において McCann が平和運動について熱弁を揮っているシーンが次の引用である。

MacCann began to speak with fluent energy of the Czar's rescript, of Stead, of general disarmament, arbitration in cases of international disputes, of the signs of the times, of the new humanity and the new gospel of life which would make it the business of the community to secure as cheaply as possible the greatest possible happiness of the greatest possible number(5.802-807).

引用の2行目に Stead という名前があるが、これはイギリス人ジャーナリストの William Thomas Stead である。Levenson によると、Skeffington がフェミニズムや平和主義に傾倒したのも Stead による記事がきっかけであり、後述するような悪評にも関わらず、彼は Stead を支持し続けたようである(134-5)。また Stephen による回想の場面にも Stead を信奉していることが表われている。

—Dedalus, you're an antisocial being, wrapped up in yourself. I'm not. I'm a democrat: and I'll work and act for social liberty and equality among all classes and sexes in the United States of the Europe of the future(5.125-8).

引用の“The United States of Europe”は、1899年に出版された Stead による著書のタイトル *The United States of Europe on the eve of the Parliament of*

peace から来ている。

Stead は、大衆タブロイド紙に代表されるイギリスのセンセーショナルなジャーナリズムを生み出した人物であり、新聞 *Pall Mall Gazette* に1885年掲載された“The Maiden Tribute of Modern Babylon”という記事で一躍有名となった。この記事は児童売春の実態を暴きだしたもので、当時モラル・パニックと呼ばれる反響を生み出し、売春の取り締まりを強化する“The Criminal Law Amendment Act 1885”の成立に貢献し、社会浄化運動に拍車を掛けることとなり、同時に猥褻出版物の取り締まりが強化された。

しかし、上記の記事には大きな問題があった。少女の母親と共謀し、自らが売春宿に連れ込んだ上で救い出すという、いわゆる「やらせ記事」であったことが発覚する。その結果、自らが成立に貢献した法律で最初に有罪判決を受けることとなるのである。事実が発覚した後、Skeffingtonのように支持し続けた人々はいたものの、Stead のジャーナリスト人生は大きく損なわれることとなった。また彼は交霊術など神智学にも通じており、Helena Blavatsky に関する記事や Gladstone の霊との会話などを記事にしており、19世紀末から20世紀初頭にかけての胡散臭い人物の代表格とも言える。

Stead が社会浄化運動のあとに取り組んだものが、平和運動と女性参政権運動である。ロシア皇帝の呼びかけで開催された万国平和会議をジャーナリズムで支えたのが Stead である。その延長で書かれたのが前掲の Stead の著書であり、タイトルのようにヨーロッパがアメリカのような連邦国家となることを主張しているものである。

さてこれらの Stead の思想になぜ Joyce は反対したのであろうか。社会浄化運動に関しては、疑問の余地がないであろう。Joyce はいかなる理由であれ芸術家の表現の自由が阻害されることに反対したのである。*Portrait* 第5章第3節で劇場内の様子が描かれている (5.1843-59) が、1899年アイルランド文芸劇場の旗揚げ公演として *The Countess Cathleen* が上演された時、それを純潔なアイルランドに対する侮辱だと感じた学生たちは舞台に向かって怒号を浴びせる。そして翌日 Skeffington が中心となり、新聞に掲載する抗議文の署名を集めるが、Joyce はこれにも署名しなかったのである。

社会浄化運動については Mullin の著書で詳説されている。それによると、そもそも社会浄化運動はイギリスのプロテスタントが主導し、ヨーロッパ大陸の害悪から優れたイギリス人の純潔性を守らなければならないとした帝国主義的な思想であるが、Skeffington を含めアイルランドのナショナリストたちはその論理を利用して、自らの民族の優位性を説いたのである。民族に優劣をつけるようなことは、のちに *Ulysses* でユダヤ人を主人公にした Joyce が嫌悪することである

うし、被支配者側で帝国主義を嫌悪すべきであるのにイギリス人プロテスタントの論理を使って同様の主張をし、作家の表現の自由を認めようとしない態度に反感を持つのは当然である。

Joyce は社会浄化運動により創作活動を阻害された被害者のひとりである。猥褻な表現があることを懸念した出版社の自己検閲により契約が破棄され、*Dubliners* の出版には7年もの歳月がかかった。Ezra Pound の支援により *Portrait* の雑誌連載が始まり、諸作品の出版へとき着けたのであるが、その間 Skeffington を先頭に同世代のナショナリストたちは、Joyce を支援するどころか、社会浄化運動の思想を普及させることで創作活動を阻み続けたのである。Joyce の彼らに対する恨みが *Portrait* には強く刻印されている。和解へと気持ちが向かうのは、*Ulysses* 以降の作品であろう。

一方、なぜ平和運動の署名を拒否したのか、Joyce の数々の伝記資料には何も記載はないし、Levenson も不明であるとしており、Skeffington 側の手記や書簡にも記録はないようである。実際に Joyce は明確な理由は語らず、*Portrait* で描かれるような捨て台詞を吐いただけなのかもしれない。しかしながら、Levenson はヒントを与えてくれている。Joyce は自らの武勇伝であるかのように自分だけが署名しなかったかのように演出しているが、この平和運動の署名は他にも拒否した学生も多く、のちに国会議員となり Skeffington の義理の兄となった Thomas Kettle は「イギリス軍海軍による支配権の固定概念化を意味する」(134) という理由で拒否したのである。それは一体どういうことなのかについては、*Portrait* に示唆されている前述の Stead の著作を探ってみよう。

In Europe, therefore, the right of levying war is vested almost solely in the Queen, her grandson, and her grand-daughter's husband. Nicholas II, William II, and Victoria—these three are the Triumvirate of Europe. And as the late Tsar said to me at Gatschina, "If these three—Russia, Germany, and England—hold together, there will be no war" (32).

Stead はヨーロッパの情勢を分析した上で、ドイツ、イギリス、ロシアとそれぞれ同盟を組んでいる国々があり、この3カ国が手を組めばもはや戦争は起こらないと述べている。それは民族による自決の権利を捨て、ヨーロッパのすべての国々がこれら強大国の支配下に置かれることを意味する。*Portrait* において Stephen は民族主義者の学友 Davin に「世界平和の請願に署名したのだから、君の部屋で見たあの小さな習字帳は捨てるのだろうか」(5.985-7) と尋ねているが、強大国の支配下にすべての国々を置こうとする平和運動の根底にある思想とアイルラン



ドの独立運動との矛盾を問うているのである。そして、次の引用がまさに Kettle が反対したものであろう。

...that Europe without England would be Europe without the one Power the expansive force of whose colonizing and maritime genius has converted Asia and Africa into European vassals and has secured the American and Australian continents as receptacles for the overflow of Europe's population. And this also may be added, that Europe without England would be Europe without the one Power whose sovereignty of the seas is nowhere exerted for the purpose of securing privilege or favor for English flag or English trade(40-1).

上記の引用は、イギリスがヨーロッパのリーダーとしてさらに海軍力を強め、ヨーロッパ以外の国々を支配しようとする帝国主義的な発想でしかない。ロシア皇帝の平和会議の呼びかけは、表面上すばらしいものだと感じられるが、根底にあるのは帝国主義なのである。Joyce も Kettle と同じ理由で署名を拒否したのかもしれない。

実際ロシアは、平和を訴えながらも、アジアへの進出を目論んだことで1904年には日露戦争が起り、バルカン半島への進出が要因のひとつとなり1914年に第1次世界大戦が勃発した。ちょうど日露戦争が行なわれていた時期に *Stephen Hero* が執筆され、第1次世界大戦が勃発した頃に *Portrait* が完成、最終修正されていたことは決して無関係ではないだろう。雑誌連載時の *Portrait* の読者にはロシア皇帝が平和を推し進める感謝状を贈るべき人物でないことは明らかであったはずである。

*Portrait* において Stephen は署名を拒否した明確な理由を述べていないが、Joyce は「正統的なイエスを持つじゃないか」(5.852-53) という一言により、Stead によって誇大に宣伝されたものの虚像を暴き、そして支配者側イギリス人プロテスタントたちの論理であるのにそれを鵜呑みにし、理想主義を掲げ友人たちに強要する Skeffington の愚を暴き出し、彼の心を悩ましてきた Skeffington に “No” を言い渡しているのである。

## おわりに

Skeffington は Joyce が批判したヒロイズムを体現することとなった。1916年イースター蜂起の際、民衆によって略奪行為が行われているのを見た Skeffington は、それを止めさせようとダブリン市内を奔走する。その最中、彼

は反乱軍の一味であると間違えられてイギリス軍に拘束され、裁判にかけられることもなく射殺されてしまった。射殺したイギリス軍将校 Colthurst が、Skeffington が徴兵に反対したボーア戦争に志願して精神異常をきたしてしまったアイルランド人であることは、歴史の皮肉である。Joyce はこのイースター蜂起における旧友の悲劇について何を思っていたのであろうか。当然関心を示したはずであるが、それを知る資料は残されていない、もしくはアイルランド国立図書館で非公開のまま眠っている。

しかし、イースター蜂起の後に書かれた作品で *Ulysses* において主人公 Bloom が迫害や不正に対して力で対抗することを訴える *The Citizen* に対して、大事なものは「愛」とであると語る (12.1485) とき、そこには「すべての政治改革、経済改革は一滴の血も流すことなく成し遂げることができる」(Levenson 18) と信じている平和主義者 Skeffington の影を感じることができないのではないだろうか。本稿では *Portrait* に見られる Skeffington と Joyce の戦いを考察したが、Joyce 自身が作家としての立場を確立し、不運な死を迎えた Skeffington との和解の気持ちへと Joyce が向かった後に書かれた作品に与えた影響についても今後考察する必要がある。

専修大学

### 参考文献

- Bowker, Gordon. *James Joyce: A Biography*. Phoenix, 2012.
- Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man: Authoritative Text, Backgrounds and Context, Criticism*. Edited by John Paul Riquelme, Text edited by Hans Walter Gabler with Water Hettche, Norton, 2007.
- \_\_\_\_\_. *Letters of James Joyce*, II. Ed. Richard Ellmann. Viking, 1966.
- \_\_\_\_\_. *Stephen Hero*. 1963 New Directions fourth edition; ed. Theodore Spencer et al. New Directions, 1963.
- \_\_\_\_\_. *Ulysses*. Edited by Hans Walter Gabler, The Bodley Head, 1986.
- Joyce, Stanislaus. *My Brother's Keeper: James Joyce's Early Years*. Edited by Richard Ellmann, Viking, 1958.
- \_\_\_\_\_. *The Dublin Diary of Stanislaus Joyce*. Edited by George Harris Healy, Faber and Faber, 1962.
- Levenson, Leah. *With wooden sword: a portrait of Francis Sheehy-Skeffington, militant pacifist*. Gill and Macmillan, 1983
- Levin, Harry. *James Joyce: A Critical Introduction*. Revised and augmented edition. New Directions, 1960.

- Mullin, Katherine. *James Joyce, Sexuality and Social Purity*. Cambridge University Press, 2003.
- Manganiello, Dominic. *Joyce's Politics*. Routledge and Kegan Paul, 1980.
- Ryf, Robert S. *A New Approach to Joyce: The Portrait of the Artist as a Guidebook*. University of California Press, 1964.
- Stead, William Thomas. *The United States of Europe on the eve of the Parliament of peace*. Reviews of Reviews Office, 1899.

## Stephen's Refusal to Sign His Name

---

Katsuhiko Odai

---

In *A Portrait of the Artist as a Young Man*, MacCann, one of the protagonist's friends, tries to collect students' signatures. The purpose of this signature-collecting campaign is to send a letter of appreciation to the Czar who called for the Hague peace conference. However, Stephen refuses to sign his name and says, "Keep your icon. If we must have a Jesus let us have a legitimate Jesus." However, specific reasons are not disclosed to the readers and what Stephen really means by these words remains to be a secret.

This campaign was actually carried out in 1899 by Francis Skeffington, the model of MacCann, and Joyce himself also refused to sign his name. Therefore, the biographical materials of Joyce and Skeffington must give us the clues to the reasons why Stephen refuses his signature. In this essay, the personality and ideology of Skeffington will be revealed with ideas of his influencer, W. T. Stead, and the reason why Stephen refuses will be probed into.

According to Gordon Bowker, Skeffington is a "genuine eccentric" in Dublin. He was a feminist, a pacifist, a nationalist, an antivivisectionist, a vegetarian and a teetotalist. As these titles show us, he was a serious and idealistic person.

The circumstance in his childhood and the education helped to form his character. He spent his childhood in the County of Down in the present Northern Ireland. The majority of people in the county were Protestant, pro-British and anti-Catholic, and he experienced injustice and persecution when he was very young. These experiences led to his strictness about injustice and persecution, and he would take part in the nationalist movement later on. In addition, his father, who was a school inspector, didn't allow his son to go to school and educated him by himself. As a result, his son became a virtuous person, but, on the other hand, he got to be assertive and to take little heed of what others said because he had never communicated with people of about the same age in his childhood.

In their university days, Skeffington forced his idealistic views on Joyce and criticized Joyce's attitude about religion and sexual behavior, which were

important matters to Joyce. Therefore, Joyce was troubled by his criticism. According to the novelist's brother Stanislaus, he said secretly to his brother, "he was the most intelligent man, after himself." Because he thought Skeffington was intelligent, Joyce tried to face his words seriously and wanted to refute him.

Skeffington's ideas came from W. T. Stead. Stead was an English journalist and social reformer, and one of his brilliant careers was related to the social purity movement. It was firstly aimed at preventing child prostitution and proliferation of venereal diseases, but also exercised strict control over literature, which led to the rigid censorship and the limitation of writers' freedom of expression. Its claim was to protect chaste English people against foreign evils. It is an imperialistic idea that emphasized the superiority of English people. Although such an imperialistic idea should be despised by the Irish, Irish nationalists including Skeffington utilized its idea to claim the purity of their own people, and they condemned artists for their expressions in violation of their ideas. In *Portrait*, their folly is described with their hysteric cries in Stephen's reminiscence of the opening night of the Irish Literary Theatre.

Stead also sympathized with the Czar's proposal and supported the success of the Hague Conference as a journalist. The thought of the Czar and Stead was also imperialistic here. They thought world peace would be attained when small nations were disarmed and came under the control of the Great Powers. The Irish hoped to become independent of England, so it is contradictory for them to sign their names for a letter of appreciation to the Czar. Furthermore, history shows that the Czar was never a pacifist and his expansion policy gave rise to some wars.

In conclusion, it can be said that Joyce refused his signature because Skeffington believed in the ideas inappropriate for Ireland and forced his friends to act like him. Then, through his novel, Joyce refuted Skeffington's ideas which had been troubling him.

*Senshu University*